新約聖書ギリシア語語彙研究
（1）

土 岐 健 治

以下は，『言語文化』23（1986年）所載の拙論「1 Cor 3：19 の *πανουργία* について」に続く，新約聖書のギリシア語語彙研究の一環をなす研究ノートである。

I ルカ福音書 1：48 の *ταπείνωσις*

ルカ 1：48 の *ὅτι ἐπέβλεψεν ἐπὶ τὴν ταπείνωσιν τῆς δούλης αὐτοῦ* の *ταπείνωσις*（以下 *τ.* と略記）は，これまで「卑しさ，卑賤な状態」という意味であるとされてきた(1)。Bauer-Aland は *τ.* の語義として Erniedrigung, Demütigung, Niedrigkeit, Kasteiung を挙げて，ルカ 1：48 は Niedrigkeit の用例としており（他の辞典類も同様），比較的最近の，言語的に厳密な註解書でも “lowliness, humble station” (J. A. Fitzmyer (AB, 1981)), “humble state” (I. H. Marshall (1978)), “Niedrigkeit” (H. Schürmann (1969)) のように説明（翻訳）されている。筆者は「セプテュアギンタ（70人訳聖書）」（以下 LXX と略記）及び旧約聖書偽典における この語の用例の検討に基づき，いささか異なる意味の可能性を提出しうると考える者である。特に，ルカ1章と LXX との内容言語両面にわたる密接な関係に照らして，LXX の語法が重要な意味を有する。

このギリシア語は LXX に36回現われるが(2)，その内，①ヘブル語との対応関係が明瞭なものが21例，② MT（ヘブル語本文）に対応しないもの及びヘブル語との対応関係がはっきりしないものが15例である。

①の21例中17例がヘブル語 עני (ʿoni) に対応している。このヘブル語は「苦しみ，悩み，苦難」という意味であり(3)，対応する *τ.* も同じ意味で用いられている(4)。①の残る4例に対応するヘブル語は以下のごとくである。(1) エズラ (LXX 2Es) 9：5 תענית (ta ʿanîth) (Fohrer=Kasteiung, Bussübung, mortification, penance；T=self-affliction)；(2) 詩 89：3 (MT 90：3) דכא (dakkā’) (Fohrer=Staub；T=dust or contrition)；(3) 詩 135：23 (MT 136：23) שפל (shēphel) (Fohrer=Niedrigkeit；T=degradation)；(4) イザヤ 53：8 עצר (ʿōtser) (Fohrer=Verschlossenheit, Bedrückung；T=closedness, oppression)。以上，①の内，「卑賤」に近いのは，(3) 詩 135：23 のみである。

②については一義的に定め難い場合も多いが，サム上 9：16，サム下 16：12，箴言 16：19，「ベン・シラ」2：5 は (1)「苦難，苦悩，苦境」，「1マカベア」3：51 は「苦悩」ないし「悲嘆」，

「ユディト」6: 19, 7: 32, 13: 20 は外国軍に包囲され風前の灯となった状態，即ち (2)「苦境，窮状」，詩 21 (MT 22): 22 も，一角獣の前に置かれた人間の「苦境，窮状」(「3マカベア」2: 12 もおそらく (2))，「ベン・シラ」2: 4 は (3)「みじめな境遇」「逆境」，同 11: 12 は (3) ないしは「逆境の苦しみ」，同 20: 11 はおそらく (4)「低い身分」，という意味であると考えられる。イザヤ 40: 2 は MT の צבא (tsābha') (Fohrer=Frondienst; T=term of service;「口」=「服役の期」，「共」=「苦役の時」) と並行しており，LXX がこのヘブル語を「卑賤」と言いかえた可能性も否定できないが，他の用例に照らして，(1) (2) ないし (3) の可能性が高い。エレミヤ2: 24 (MT の「月」と並行) はおそらく (2) ないし (3) であろう。

以上の LXX の全般的な観察に加えて，ルカ 1: 48 との関連で重要なのは，①の例であるサムエル上 1: 11 である。ルカ 1章とサム上 1章，ルカ 1: 46–56 の「マリアの賛歌」とサム上 2: 1–10 の「ハンナの賛歌」との密接な関連を考慮すれば，ルカ 1: 48 がサム上 1: 11 の *ἐπιβλέπων ἐπιβλέψῃς ἐπὶ τὴν ταπείνωσιν τῆς δούλης σου* によることは明瞭である。この τ. もヘブル語 עני に対応しており，「苦しみ，悩み，苦悩，苦難」という意味である (ウルガタ=adflictio)(5)。

最後に，旧約聖書偽典に目を転ずると，τ. は，「12族長の遺訓」(TRub 6: 10, TJud 19: 2, TDan 5: 13, TGad 5: 3, TJos 10: 2, TBen 19: 7) 及び「ソロモンの詩篇」3: 8 では，(1)「謙遜，へり下り」という意味で，「ヨセフとアセナテ」では，(2)「懺悔の苦行」ないし「断食」(10: 17, 11: 2, 11: 17. Cf. 2Es (MT Ez)9: 5)，(3)「苦境」(11: 6)，「苦境」ないし「苦悩」(11: 12, 13: 1)，さらに 15: 3 では (1) ないし (3) の意味で，用いられている。「ソロモンの詩篇」2: 35 の τ. は「卑賤」という意味かもしれないが，*ἐλεῆσαι δίκαιον ἀπὸ ταπεινώσεως ἁμαρτωλοῦ* は直訳すると，「罪人の「卑賤」から義人を憐れむ」といういささか奇妙な文であり，失われているヘブル語原文との関係も含めて，この τ. の意味は正確に定め難い(6)。

以上より，ルカ 1: 48 の *ταπείνωσις* は「苦しみ，悩み，苦悩」という意味である可能性が極めて高いが，旧約聖書偽典の用例に照らすと「謙遜，へり下り」という意味の可能性も (マリアの賛歌全体の主要主題に照らしても) 考慮すべきであろう。これに対して，「卑賤」という意味の可能性は，極めて低い。

註

1. 日本聖書協会系邦訳は，「元」=「その使女 (つかひめ) の卑微 (いやしき) をも」，「文」=「その婢女 (はしため) の卑しきをも」，「口」=「この卑しい女をさえ」，「共」=「身分の低い，このはしためにも」。中国語訳は，「官」=「他顧念使女卑微」，「BC」=「蓋其顧其婢之卑微」，「代」=「其顧婢之卑微」，「モ」=「蓋其顧其僕之卑處」「四」=「以其垂顧婢之微」。これら邦訳と中国語訳との関係については，「翻訳史」参照。
2. どの写本の読みを採るかによって数は変わるが，ここではゲッチンゲン版 LXX (Rahlfs の机上版を含む) の本文に採用されているものに限った。
3. Fohrer=Leiden, Elend, Mühe, Mühsal; Koehler-Baumgartner=Elend, gedrückte Lage, poverty, affliction.
4. ヘブル語 עני の LXX における訳語としては，他に *πτωχεία* (10回)，*κάκωσις* (3回)，

θλῖψις (1 回), *ὀδυνή* (1 回), *πενία* (1 回), בני־עני=*ἀσθενεῖς* (1 回) が用いられている (ギリシア語との対応がはっきりしないものもある)。この内 *πτωχεία* は, 経外典を除くと LXX に 13 回現われる。

5. TDNT Ⅷ 6 ff. は LXX における עני と *τ.* の密接な関係に言及しながら (p. 6), *τ.* について論ずる際にはこの関係を全く忘れたかのごとくである (pp. 10 f.)。

6. R. B. Wright (in Charlesworth) は "to have mercy on the righteous (keeping him) from the humiliation of the sinner" と訳す。

Denis-Janssens によれば, 以上の他に偽典中では「アブラハムの遺訓」7 章に 1 度現われるが, これは通常原本に近いものとして翻訳定本に選ばれる A (長い) 版ではなく, B (短い) 版の本文であり, ここでは取り上げない。偽典については Denis-Janssens 及び Charlesworth を参照した。なお「ヨセフとアセナテ」は, 教文館版「聖書外典偽典」の邦訳とは使用底本が異なる。

II ルカ福音書 11: 8 の *ἀναίδεια*

ルカ 11: 5 ff. は, しばしば「熱心に祈れ」という教えを語っているものと理解され, 引き合いに出される。しかし。11: 5–9 のたとえ話の中には, パンの必要な人が友人に「熱心に」頼んだことは全く記されていない。8 節の邦訳「しきりに願うので」(「口」。「共」＝「しつように頼めば」) のみが「熱心さ」を語っており, 9 節以下を見ても,「求めよ……尋ねよ……門をたたけ」とはあっても, どこでも「熱心に」とは言われていない。8 節の「しきりに願う」に当たるギリシア語 *ἀναίδεια* (以下 *α.* と略記) は「恥知らず」「厚顔無恥」「破廉恥」「無礼」「冷酷, 無慈悲」(*LSJ*＝shamelessness. 例外的に unforgivingness の用例あり) といった意味のことばであり, この語を「熱心さ」や「しつこさ」のような意味に用いた例は皆無である。ホメロス, ソポクレス, ツキディデス, プラトンなどにおいて, 上記の意味で用いられており, 紀元後 1 世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスにおける全 10 例も同様である(1)。LXX の用例は「ベン・シラ」25: 22 (*ὀργὴ καὶ ἀναίδεια καὶ αἰσχύνη μεγάλη/γυνὴ ἐὰν ἐπιχορηγῇ τῷ ἀνδρὶ αὐτῆς*) のみであるが, ここでは *α.* は, 妻に養われる夫の「恥知らず」ないし「不面目, 恥辱」, あるいは夫を養う妻の「傲岸不遜さ」(ウルガタは inreverentia) を表現している。

ウルガタはルカ 11: 8 の *α.* を improbitas と訳している。このラテン語には「厚かましさ, 図々しさ」という意味もあるが, 普通はむしろ「邪悪」「不正」「不正直」といった意味で用いられる(2)。古ラテン語訳聖書の中には importunitas と訳しているものもあるが(3), これは「無思慮, 配慮の無さ, 無情さ, 無礼, 横柄, でしゃばり」といった意味のことばで, いずれにせよ「熱心さ」という意味のことばではないが(4), ただ「相手に対する配慮を欠いたり, 相手が自分のことをどう思っているかを全く顧みない, 行動 (要求)」はこのラテン語の語義の中に含まれ得る。

このたとえの中心は, パンを求める人ではなくて家の中で寝ていた人の方にあり,「恥知らずの故に」によって示されているのは家の中の人の態度である, と説明する者もある(5)。その場合,「恥知らずの故に」は「他人から恥知らずと思われると困るので」という意味となり, たとえのポイントは, 人間同士でもこれくらいの親切はする——もっともそれは「見栄」や

「世間体」を気にしてのことかもしれないが――まして神は人間の願いを聞いて下さるに違いない，という点にあることになる。この解釈はいちがいに退けられないが，難点は，διὰ τὴν ἀναίδειαν を「恥知らずと思われると困るので」という意味に理解することは，文法的に不可能ではないにしても，不自然であり，いささか疑問に思われることである(6)。やはりこのギリシア語表現は，「恥知らずの故に」あるいはむしろ「恥知らずを通して」と解して，深夜にパンを求める人の態度を語っていると考える方が，自然であろう。

たとえの設定は，ある人が，人々の寝静まった真夜中にパンを求めて隣人の家の戸を叩くのであり，これは古代中近東においても非常識な「恥知らずな，図々しい」行為であったと言い得るであろう。「熱心さ」を描きたいならば，他に適切な場面設定や字句があるはずで，ここではパンを求める男の恥知らずな，度を越えた厚かましさが言われているのである。

最後に，「口」や「共」の由来を探るべく，聖書翻訳史を概観してみたい。

英訳聖書では，α. をティンダル（1526 年）が importunity と訳して以来，この英訳語は AV（Authorised Version 1611 年）及び RV（Revised Version 1881 年）を経て RSV（Revised Sandard Version 1952 年）にまで引き継がれている。カルヴァンとカルヴァンの影響下にあると思われるフランス語訳(7)も importunité と訳している。これら英仏語訳は，上記の古ラテン語訳 importunitas によるものと思われるが，英語 importunity と仏語 importunité は「うるさくする（頼む）こと，しつこいこと（要求）」という意味である(8)。これら英・仏語では，上記のような importunitas の派生的な意味「相手に対する配慮を欠いた態度，行動」がとりわけ「懇請，要求」と（排他的にではないが）結合している。つまり，「恥知らず」（ギリシア語）が「相手に対す配慮を欠いた（図々しい）態度，行動」（ラテン語）をへて「しつこく頼むこと」（英・仏語）へと転化したのである（これが「口」や「共」につながることは明瞭であろう）(9)。

これに対して，「ルター訳」は，1522 年（初）版から 1877 年版までは（それ以降 1964 年以前については未確認）um seines unverschämten Geilens［恥知らずに熱望するので］（1531 年のチューリッヒ聖書も同じ），1964 年及び 1984 年改訳は um seines unverschämten Drängen［恥知らずに迫る（強要する）ので］と，「恥知らず」ということばを正しく保ち続けている（もっとも，ここでも「熱望」や「強迫，強要」が加わることによって「しつこさ」という意味に理解される可能性が加わっている）。英仏訳と比較した際のルター訳の正確さは，ルターが多くを負っているエラスムスのラテン語訳 impudentia［恥知らず］によるところが大きいと思われる(10)。ヨーロッパの代表的な現代語訳聖書は，いずれも「厚顔無恥」「恥知らず」といった意味のことばを的確に用いている。［英］NEB: shamelessness;［仏］La Bible de Jérusalem: impudence(11);［独］Die Bibel in heutigem Deutsch: Unverschämtheit。

最後に，邦訳聖書の系譜をたどると，「文」＝「求めの切なるにより」，「元」＝「ひたすら請うが故に」。中国語訳聖書は(12)，①「官」＝「終必因他不住的懇求」，②「BC」＝「以其切迫」，③「代」＝「以其迫切」，④「モ」＝「蕨多催故」，⑤「四」＝「為其煩数」(13)。以上より，「元」と「文」が，中国語訳聖書の影響下に，おそらく importunity（importunité）という英（仏）訳聖書の伝統をも参照しつつ（或いは，ルター訳も上記のように「しつこさ」というニュアンスで理解され，参照されたかもしれない）生まれたことはほぼ確実である。和漢両

訳の関係のより一層の厳密化，中国語訳聖書の流れとその由来の調査については，今後の課題としたい。

註

1. 同根の形容詞 ἀναιδής についても同様。フィロンの用例は ἀναιδής (『モーセの生涯』I 130=「最も恥知らずな動物すなわち犬と蠅」) の1例のみ。参考までに，旧約聖書偽典では α. は1回 (Sib 4 : 36)，ἀναιδής は「シビュラの託宣」(11回) と「12族長の遺訓」(2回) に計13回現われ，いずれも上記の意味である。
2. ウルガタでは improbitas はここのみだが，improbus は3回(Ps 14 : 4 ; Sir 13 : 13 ; Bar 4 : 15)，いずれも明瞭に悪い意味で否定的に用いられている。
3. *The New Testament in Greek* III-1 (Oxford : Clarendon, 1984) による。
4. ウルガタには importunitas は現われないが，importunus は2回(Sir 22 : 6 ; 2Th 3 : 2)，いずれも明瞭に悪い意味で否定的に用いられている。
5. I. H. Marshall, *The Gospel of Luke* (Exeter, 1978), 467 ; Cf. J. Jeremias, *The Parables of Jesus* (SCM, 1966), 118.
6. さらに ἀναίδειαν の後の αὐτοῦ は「寝ている人」よりは「パンを求める人」を指すととる方が自然である。Cf. J. A. Fitzmyer, (AB) ad loc.
7. Corpus Reformatorum 85=Calvini Opera 57 ; Louis Segond, *La Sainte Bible*. 後者については，「翻訳史」57 と関連註参照。Segond 訳では，importunité は1回しか現われないが，importuner は3回 (Luc 8 : 49, 11 : 7, 18 : 5) 現われ，いずれも「煩わせる，面倒 (やっかい) をかける」という意味で，AV はこれらをすべて trouble と訳している。importunity は (同根語も含めて) AV では hapax legomenon である。
8. *OED* (2 ed., 1989) は troublesome pertinacity in solicitatian (1460-1875) の意味の importunity の用例としてティンダル訳のこの個所を挙げる。S. Johnson の辞典 (1755) では importunity=incessant solicitation, Webster (1828) では importunity=pressing solicitation ; urgent request ; application for a claim or favor, which is urged with troublesome frequency or pertinacity. *Le Grande Robert* (1985) は Vieilli として action, fait d'importuner, sollicitation pressante, prière instante という語義を示す。Littré もほぼ同じ。『新英和大辞典』(研究社) 及び，『仏和大辞典』(白水社) をも参照。後者は「じゃま(迷惑)なこと」という語義も示す。
9. 英語の importunity やフランス語の importunité の語義が，15—17世紀から現代に至る迄の間に変わってきた可能性も考慮すべきかもしれない。また，importunitas が15—17世紀に importunity や importunité に置き変えられた際に生じた意味のずれについても，さらに厳密に検討しなければならないが，そのためには当時の羅・英・仏語の語法の総合的な調査が必要であり，今後の課題としたい。参考までに，*A. Lexiconof St. Thomas Aquinas* by R. J. Deferrari and M. I. Barry によれば，importunitas=solicitude, uneasiness of mind ; importunus=importune, inopportune, untimely ; *Dictionnaire Latin-Français des Auteures Chrétiens* par A. Blaise によれば，importunitas=importunité, ennui, défaut de ceux qui agissent a contre-temps ; importunus=nuisible à, inopportun。
10. impudentia=shamelessness, effrontery, impudence, immodesty。ルター訳新約聖書は，エラスムス校訂のギリシア語新約聖書に印刷されたギリシア語本文よりはむしろその右側に並べて印刷されていたエラスムスによるラテン語新訳及び巻末の詳細な註釈によるところが

大きい。この点については，*Hitotsubashi Journal of Arts and Science* に近く公表予定の拙論参照。

11. 前註参照。ちなみに，La Bible de Jérusalem は importunité と importun は一度も用いないが，importuner のみは5回 (Dt 24: 5; 2Ro 2: 17; Pr 6: 3; Luc 18: 5; Act 24: 4) 用いている。

12. 中国語訳聖書のうち①②③は「元」の（おそらく「文」の，そして部分的に「口」の）訳出に際して参照され，その訳文に影響を与えている。この点も含めて，中国語訳聖書の歴史とその日本語訳聖書への影響については，「翻訳史」参照。

13. 参考までに，中国語訳聖書の読み下しないしは大意を以下に記す（これについては漢文・中国語・中国文学専門の複数の同僚その他の方々の教えを受けた)。①「ついに彼が繰り返し（たえまなく）求めるので」，②「その，せつに（しきりに）せまるをもって」，③「そのせまることせつなるをもって」(②③は，頼む人の態度の切羽詰まった様子を表現している)，④「そのおおくうながすをもって」，⑤漢文訓読としては「その煩わすことしばしばなるをもって」となるが，中国語文の意味としては「煩わす」というよりはむしろ，「それが繰り返され（頻繁であっ）たために」と解される。

III *ἀνυπόκριτος*

ἀνυπόκριτος（以下 *αν.* と略記）は，新約聖書において6回用いられており，*ἀγάπη*（ロマ 12: 9, IIコリ 6: 6），*φιλαδελφία*（Iペテロ 1: 22)，*πίστις*（Iテモテ 1: 5, IIテモテ1: 5)，*σοφία*（ヤコブ 3: 17)，と結びついており，「偽りのない」「偽善のない」「誠実な」「真実な」といった意味であるとされている(1)。

αν. は，「(劇の中で俳優として）何かの役を演ずる」「(一般的に)役割を演ずる」「(偽って)ふりをする」という意味の *ὑποκρίνομαι* から派生した形容詞の頭に，否定の接頭辞をつけた形容詞であり，ことばの成立ちに照らして上記の意味は当然のように見える。しかしながら，このギリシア語には，LXX の2例以外には明確に新約聖書以前の古代ギリシア語文献の用例がなく，*LSJ* では，用例として，LXX と新約聖書以外には，誤ってパレロンのデメトリオスの名の下に伝えられた，著者不明の『文体論』194 が挙げられているのみである(2)。そこで，以下，この『文体論』と LXX の用例を検討する。

『文体論』の正確な年代は不詳であるが，紀元前1世紀から後1世紀頃の作品と考えられており(3)，年代的には新約聖書に近い可能性が高い。その用例は，標題のとおり文体を論ずる，以下のような文脈の中に現われる。"*ἐδεξάμην, ἔτικτον, ἐκτρέφω, φίλε.*" という文章は引き締まった，演劇に用いるにふさわしい文体で（*ὑποκριτικόν*）あるが，これら3つの動詞の間に *καὶ* を挿入すると，訴える力のとぼしい（*ἀπαθής* ないし *ἀπάθεια*）ものとなり，そのような文章は *αν.* ＝「演劇には向かない」，というのである。

LXX における *αν.* の用例は，「ソロモンの知恵」5: 18 と 18: 16 である。「ソロモンの知恵」の5章は，神が義人を守るべく，不敬虔な者不義な者たちを相手に戦う際に用いる，さまざまな武器を列挙する中で，「激しい怒り」を「剣」とし，「聖さ」を「楯」とし，「正義」を「胸当てとして身にまとい」(4)，「*αν.* な裁きをかぶととしてかぶる」(5: 18 *περιθήσεται*

κόρυθα κρίσιν ἀνυπόκριτον）と記すのである。この *αν.* について，「偽りのない，見せかけでない」という意味の可能性は否定できないが，文脈からはむしろ，「決して取り消されることのない，峻厳な，断固とした，確固たる意志に基づいた」というような意味にとるべきであろう(5)。

もう一つの用例に目を転ずると，「ソロモンの知恵」18章は，神がイスラエル民族を救うためにエジプト人と戦った時のことを回顧し，神のことば（ロゴス）が敵を決して容赦しない厳しい兵士（戦士）として地上へ下ったと記し，それに続いて，その神のことばは神の「*αν.* な命令（指示）」を鋭い剣として身に帯びていた（*ξίφος ὀξὺ τὴν ἀνυπόκριτον ἐπιταγήν σου φέρων*），と記すのである。ここでも *αν.* は，前例同様，「偽りのない，見せかけでない」というよりはむしろ，「決して取り消す事のない，断固たる，峻厳な，確固たる意志に基づいた」といった意味であると考えられる(5)。

「ソロモンの知恵」と新約聖書諸文書との密接な関係は広く認められており，後者による前者の直接的使用（利用）は，パウロの場合も含めて，証明は困難であるが，その可能性は極めて高いと考えられている(6)。そこで，以上に検討した用例に照らして，たとえば，ロマ書 12：9 に「愛は *αν.* である（或いは，であれ）」とある場合に，「愛は偽りなきものである（あれ）」という意味であるかもしれないが，むしろ，「峻厳な，確固たる意志に基づいたものであり，断固として行なわれるべきものである」と言ったニュアンスが込められている可能性は高く，少なくとも，伝統的な「偽りのない」「真実な」という意味に一義的に限定することは適切ではない。

註

1. Bauer-Aland＝ungeheuchelt. 他の新約ギリシア語辞典も同様。日本聖書協会系の邦訳聖書では，たとえばロマ 12：9 の「*ἡ ἀγάπη ἀνυπόκριτος*」は，「元」＝「愛は偽ること勿れ」，「文」＝「愛には虚偽（いつはり）あらざれ」，「口」＝「愛には偽りがあってはならない」，「共」＝「愛には偽りがあってはなりません」，と訳されている。参考までに，「代」＝「愛無僞」，「BC」＝「愛宜毋僞」，「官」＝「愛人不可虚假」。この文では「エイミ動詞」が省かれているので，「である」ととることも「であれ」ととることも，どちらも可能。
2. フィロン『創世記問答』(Quaestiones et Solutiones in Genesin) III 29 の Procopius による断片に *τὸ τοῦ ἤθους ἀνυπόκριτον* とあり，R. Marcus (LCL) はその部分を a sincere nature と訳している。しかし，『創世記問答』は全体としてはアルメニア語伝承しか残っておらず，Marcus も全体をアルメニア語版から訳しており，また断片を伝えている Procopius は6世紀の人物であり，これをただちに新約と同時代ないし以前の資料とすることはできない。さらに，かりにこれがフィロンの真性の言葉を伝えていたとしても，フィロンと新約聖書の言葉づかいの関連は，以下で取り扱う「ソロモンの知恵」と比較して，希薄である。しかし， Bauer-Aland や TDNT がこの断片を参考資料として示さないのは，そのような判断に立つというよりは，見落したのであろう。
3. *The Cambridge History of Classical Literature, I. Greek Literature*(1985), 859 f.
4. 「正義を胸当てとしてまとい」(*ἐνδύσεται θώρακα δικαιοσύνην*) からエペソ 6：14 が連想される。エペソ 6：10 以下の「神の武具」に関する部分は明らかに「ソロモンの知恵」5章の影響下にあり，特に14節の「正義の胸当てをまとい」(*ἐνδυσάμενοι τὸν θώρακα τῆς*

δικαιοσύνης) では，「ソロモンの知恵」5：18 との類似が顕著である。エペソ書はパウロのものではないとする説が有力であるが，パウロの真性の書簡と考えられている書簡の中にも「ソロモンの知恵」の影響がうかがわれ，例えば第一テサロニケ 5：8 の「信仰と希望の胸当と，救いの希望というかぶとを，身につけ」や，同 5：2–3 は，「ソロモンの知恵」18：14 以下の影響を受けている可能性が高い。後述及び，註 6 参照。

5. 以下に，主要な近代語訳における「ソロモンの知恵」5：18 と 18：16 の該当部分を紹介する。（ ）内の数学は出版年。Kautzsch (1900) : streng aufrichtiges Gericht ; deinen unwiderruflichen Befehl/Charles (Holmes) (1913) : judgement unfeigned ; thine unfeigned command/RSV (1952) : impartıal justice ; thy authentic command/NEB (1961) : the helmet of doom inflexible ; the sharp sword of thy inflexible decree/Helmut Lampartner in *Die Apokryphen* 2 (1972) : wahrhaftiges Gericht ; dein strenges Wort/La Bible de Jérusalem (3 ed. 1973) : un jugement sans feinte ; ton irrévocable décret/Die Bible in heutigem Deutsch (1982) : unparteiisches Gericht ; deinen unwiderruflichen Befehl/Arnim Schmitt (1986) : strenges Gericht ; deines unerbittlichen Befehls/「フランシスコ会訳」「正しい裁き」；「取り消しえないあなたの命令」/「関根正雄訳」（講談社版＝教文館版）「偽りなき裁き」；「容赦せぬ命令」/「共」「偽りのない裁き」；「取り消しのきかないあなたの命令」。参考までにウルガタでは (Sap. 5 : 19) judicium certum ; (18 : 16) insimulatum imperium tuum ; (Ro 12 : 9) dilectio sine simulatione

6. A. Schmitt, *Das Buch der Weisheit* (Echter, 1986), 31 ; G. W. E. Nickelsburg, *Jewish Literature between the Bible and the Mishnah* (Fortress, 1981), 184 f. ; J. Geyer, *The Wisdom of Solomon* (SCM, 1963), 58 ; フランシスコ会聖書研究所『知恵の書』(1967 年) 14 f.

略号表

AB＝Anchor Bible

Bauer-Aland＝*Wörterbuch zum Neuen Testament* von W. Bauer, 6., völlig neu bearbeitete Aufl. von K. und B. Aland (Gruyter, 1988)

Charlesworth＝*The Old Testament Pseudepigrapha* ed. J. H. Charlesworth, 2vols (Doubleday, 1983, 1985)

Denis-Janssens＝*Concordance grecque des Pseudépigraphes d'Ancien Testament* par A.-M. Denis et Y. Janssens (Peeters, Brill, 1987)

Fohrer＝*Hebräisches und aramäisches Wörterbuch zum Alten Testament* von G. Fohrer, 2., durchgesehene Aufl., (Gruyter, 1989) ; E. T. of 1 ed.＝1973.

Koehler-Baumgartner＝*Lexicon in Veteris Testamenti Libros* ed. L. Koehler u. W. Baumgartner (Brill, 1953).

T＝*Tanakh: A new Translation of the Holy Scriptures according to the traditional Hebrew Text* (The Jewish Publication Society, 1985)

TDNT＝*Theological Dictionary of the New Testament* ed. G. Kittel and G. Friedrich (E. T., Eerdmans, 1964–74)

「翻訳史」＝土岐健治・川島第二郎「聖書翻訳史における元訳・口語訳・新共同訳」（一橋大学研究年報人文科学研究 27 (1988 年 9 月))

邦訳聖書：「元」＝「元訳」(1888 (明治 21) 年)，「文」＝「文語訳（大正改訳)」(1917 (大

正6）年），「口」＝「口語訳」（新約＝1954年，旧約＝1955年），「共」＝「新共同訳」（1987年）

中国語訳聖書：「官」＝「北京官話訳（シェレシェフスキー訳）」（1872年），「BC」＝「ブリッヂマン＝カルバートソン訳」（1859年），「代」＝「代表訳」（1852年），「モ」＝「モリソン訳」（1814年），「四」＝「四史攸編（ししゆうへん）」（バセ訳。18世紀初頭？）